

# 論文要旨

古代天皇の葬送儀礼について—飛鳥・奈良～平安初期を中心に—

2021M43003 徐嘉麒

本論文は、天皇の葬送儀礼を焦点にあて、日中交流について研究するものである。中国文化を受容し始めたばかりで変動が多い時期であった。飛鳥末期から平安初期を中心として考察した。天皇の葬礼を通して、中国文化をどのようにして日本的土壌に根付かせたのかを具体的に論じた。また、この時期の仏教はどのように位置付けられたかについて考察した。

第一章は、日本古代・中世の葬送儀礼の必要不可欠な要素である「ケガレ」と「モガリ」について考察した。死の穢れは飛鳥・奈良朝以前から存在したものであり、平安時代から膨張したことを明確にした。また、延喜式の条文より死の穢れと葬送の関係について述べた。さらに、穢れと切り離せない殯の期間について論じて、殯宮儀礼の宗教的意義を考察した。

第二章は、『日本書紀』と『続日本紀』の記録より、歴代天皇の葬送儀礼の流れを確認し、殯の短縮した時期を明らかにした。また、中国の礼制を受容して、挙哀・素服や殯宮儀礼が成立したことを確認した。さらに、初七から七七などの仏教的作法の位置付けについて考察した。最後に、中国の礼制と仏教の影響と殯の期間と関連づけて論じた。

第三章は第二章と同じように、平安初期の天皇の葬送儀礼を見てきた。奈良時代の挙哀・素服に加わり、服喪も導入された。服喪の制が始まったことより、朝賀をはじめ多くの儀礼が停止されることに加えて、通常の政務も停滞の状態になる。このように、長期の服喪は公務を妨げる原因になるのは問題だった。それを解決するため、中国の以日易月の制と心喪が導入された。その日数は、積服がおおよそ十三日目、諒闇（心喪）は一年後とほぼ一定になったと言えるだろう。このように、奈良時末期の初七から七七の齋会及び読経など仏教的要素に加わり、平安時代初期には中国の礼制も多数導入した。

第四章は、前述を踏まえて仏教からの影響と中国からの影響について論じたものである。奈良時代の天皇の葬儀は、僧尼の慟哭から七日ごとの設齋へと変容した。薄葬を徹底した元明天皇以外、ほとんど記録されたことから、初七から七七の齋会は重要な儀礼であったことがわかる。奈良時代には、中国仏教を受容し始める時期であり、少し混乱していることについて論じた。平安時代になると、空海をはじめ円仁や宗叡など入唐僧の帰朝時には数多くの陀羅尼関係の仏書が請来された。死霊鎮送としてすでに成立していた中国の陀羅尼信仰が、九世紀以降こうして請来され、日本の誦呪的密教もそれまでの現世の救済を目的としたものとは異なり、「たましずめ」の呪術すなわち、死者のための鎮魂呪術として用いられるようになった。また、光明真言や尊勝陀羅尼による呪術的作法は後世の葬式仏教の手前の段階であることについて論じた。

服喪の導入により、葬送・忌服などの凶礼は宗廟・社稷の祭祀などの吉儀と混在する状態になる。高取正男氏は仏教の鎮魂がそれを解決する方法であったと主張した。筆者は、それに加わり、「以日易月」と「心喪」もすみやかに「積

服従吉」を実現した手段であると論じた。

本稿を通して、飛鳥末期から平安初期の天皇の葬送儀礼は二つの段階に分けられていることが分かる。一つ目は天皇崩御後、殯をしてからの埋葬をもって終了することである。二つ目の服喪の終了で儀礼が終了することである。一つ目の段階から二つ目の段階へと変遷する過程で、中国の礼制と仏教を取り入れるたびに取捨選択をしていることが分かる。またその外来のものを受け入れたあと、すぐには反映するわけでもない。例えば、服喪が導入されるとすぐに適用されず、何十年もかけてようやく天皇の葬儀に定着するようになる。さらに、受け入れた内容はすべて日本に適合することが難しいので、日本の文化土壌に根付くことが可能なものに変容させていくことが考えられる。